自分の考えを表現し、学び合う児童の育成
～国語科における「話す・聞く」活動の指導をとおして～

下関市立川棚小学校

1　主題設定の理由

(1) 社会的な背景と学習指導要領が目指す方向性から

○　社会的な背景と学習指導要領が目指す方向性

現在、世界を取り巻く環境は大きな変換期にある。グローバル化の加速度的進展や人工知能（AI）の飛躍的な進化などの絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく、また、急速に変化しており、将来の社会を予測することが困難な時代となっている。学校教育では、解き方が決まった問題を効率的に解いたり、決められた手続きを機械的に達成したりするだけでなく、主体的に感性を働かせて、他者と協働しながらより豊かなものを創り上げていくことが期待されている。このことは、小学校学習指導要領解説「国語編」で、「中央教育審議会答申においては、予測困難な社会の変化に主体的に関わり、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を自ら考え、自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身につけられるようにすることが重要であること、こうした力は全く新しい力ということでなく学校教育が長年その育成を目指してきた「生きる力」であることを改めて捉え直し、学校教育がしっかりとその強みを発揮できるようにしていくことが必要とされた。」と示されている。

学習指導要領では、子供たち一人ひとりに「生きる力」を育成するために、全ての教科等の目標及び内容を「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の３つの柱で整理している。この３つの柱で示された資質・能力を身に付けていくために、子供たちが学習内容を人生や社会のあり方と結びつけて深く理解し、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにすること、さらに学習の過程で主体的に学ぶことの意味と自分の成長を結びつけたり、周りの人と対話しながら考え深めたり、広げたりしていくこと、いわゆる**「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）の視点からの授業改善」**を推進することが求められている。

（２）昨年度の反省から

本校では、「確かな学力」とは、知識や技能に加えて、学ぶ意欲や、自分で課題を見付け、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力等までを含めたものと捉え、昨年度までの３年間『「確かな学力」を身につける指導の工夫』を研修主題とし、算数科を中心に研究を重ねた。

昨年度は、副主題を「自分の考えを表現し、互いに学び合う子供の育成」として、課題提示の工夫や課題の焦点化、解決の見通しをもたせるための工夫などについて研究を進めてきた。その中で、「話すこと・聞くこと」や、問題の読み取りに課題があることが分かってきた。そこで、３年間研究を進めてきた算数科での授業研究を一区切りとして終え、全ての教科の基盤ともなる国語科で研究を進めていくこととした。また、昨年度までの反省から、以下のような児童の課題があがった。

・自ら課題を見出し、主体的に学ぶ意欲に乏しいこと。
・自分の考えを順序立てて適切に伝えることが難しいこと。

そこで、昨年度の副主題であった「互いに学び合う児童の育成」について、継続して取り組む必要性があると考え、今年度の主題を「自分の考えを表現し、学び合う児童の育成」として設定した。

2　研究仮説

自分の思いを話したり、友達の考えを聞いたりする活動を大切にすることで、話し合いや聞き合いが生まれ、学び合う姿が見られると考える。そのために、国語科をとおして「話す・聞く」の素地をつけることが必要である。その中で、自分の考えを明確にもつための手立てや、自分の考えを表現したいと思わせる授業の展開の工夫・改善に取り組んでいけば、互いに学び合う子供の育成につなげることができるだろう。

3　研究の進め方

全体研修では、年間３回全校授業を行い、校内研究会で全体授業について研究協議を行う。研究協議は、ワークショップ形式で授業の視点についてグループ協議後、発表を行う。本校は、経験年数の少ない教員が多いため、全員が意見を出しやすいよう、少人数でグループ協議を行う。

また、全校で一貫した指導を行うため、学習規律や授業づくりの重点目標等を全体で確認する。

学年（ブロック）研修では、年間１人１授業研究（互見授業）を行い、低・中・高学年ブロック中心に協議を行う。（協議はだれでも自由に参加できる。）

若手教員を中心とした勉強会「のびのび会」は、毎回テーマを決めて学級づくりや授業づくりを中心として自主的に運営する。

4　研究の視点

①　自分の考えを表現したいと思わせる授業の展開の工夫

- ○　課題提示の工夫
- ○　ICT の効果的な活用
- ○　ワークシートの工夫
- ○　「めあて」の吟味
- ○　既習事項の視覚化（掲示、板書）
- ○　自分の立場の明確化

②　互いに学び合うための手立て

- ○　学級経営（支持的風土づくり）
- ○　話し方、聞き方の指導
- ○　話し合う内容の精選（必要感、切実感）、焦点化
- ○　話し合いのコーディネート

5　研究の実際

（１）　高学年（５年）の実践　～作家で広げるわたしたちの読書　「カレーライス」～

めあて　　考えを比べたり結びつけたりして、作品のよさや面白さについてまとめよう。

①　自分の考えを表現したいと思わせるための手立て（ロイロノートの活用、視点の明確化）

児童がタブレットの使い方に慣れており、タブレットの規律もしっかりとできていた。ロイロノートのアンケート機能を使って可視化したり、文字数指定をして書いたりすることで、自分の

考えが表現しやすかった。

しかし、操作に時間がかかる場面があり、話す時間を多く取るために、どこを時間短縮できるか考えていく必要があるということが感じられた。また、デジタルでは思考の流れが残りにくいという課題が挙がった。そのため、デジタルとアナログの使い分けをしていく必要があるという意見が出た。

② 互いに学び合うための手立て（全体意見の反映、３人グループでの話し合い）

３人組での話し合いは、効果的であったが、視点をもって聞かせる必要があった。さらに、国語的指導をもっと行い、叙述にもとづいて理由を述べたり、表現や技法にも触れたりしながら意見を述べることができるようにしていくとよいという改善案が挙がった。

発表の仕方が分かりやすく掲示されていたが、授業の中で活用されている場面があまり見られなかった。少しでもその掲示物に触れたり、よい話し方・聞き方をしている児童を取り上げたりして、話し方・聞き方について指導をすることで、より研究主題に迫ることができると感じられた。

３人グループでの話し合い

（２） 低学年（１年）の実践～　おもいうかべながらよもう　「くじらぐも」～

めあて　じぶんがくじらぐもにのったら、ともだちにどんなことをはなすかかんがえよう。

① 自分の考えを表現したいと思わせるための手立て（くじらぐもの掲示、本文の読み取り）

くじらぐもの掲示は有効であった。また、ワークシートに自分が乗ったくじらぐもの写真を入れていたことも子供たちの意欲を高めることにつながっていた。本文のどこに書いてあるかペアで確認していたことも、叙述をもと表現することにつながった。しかし、雲の上のイメージをどのようにもたせるかという点で課題が挙がった。実際に空の上の雲から見た様子を写真や映像で映す（Google マップ等を本時でも示しておく。）などの改善案が挙がった。

ペアで確認し合う様子

② 互いに学び合うための手立て（ペアでの確認や伝え合い、全体発表の仕方）

本文を指さしながらペアでの確認がスムーズに行われていた。全体発表の際には、なかなか積極的に手が挙がらなかったが、教師が励ます声掛けや率先してポーズを取ったことで、子供達の「やってみよう」という意欲を引き出すことができた。

しかし、発表に対しての聞き手の反応や教師の返しに課題が見られた。子供の発言をつなげ、広げるような役割を教師が行っていくことが大切だと感じられた。また、低学年のうちから聞き手のよい反応を教えていくことも必要である。

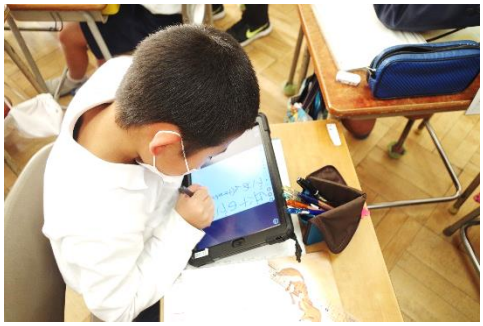
全体発表の様子

（３） 中学年（４年）の実践　～気持ちの変化を読み、考えたことを話し合おう「ごんぎつね」～

めあて　作者は、なぜ青いけむりとしたのだろう。

① 自分の考えを表現したいと思わせるための手立て（ロイロノートの使い方）

児童がロイロノートの使い方に慣れていて、日頃から活用していることがよく分かる授業であった。しかし、第１回の全校授業でも課題となった入力に時間がかかるという点が気になった。そのため、ノートに書いたものを写真に撮って送る、テキストで型を作っておくなどの改善案が出た。少しでも時間短縮できるところは行うことで、本時でねらっている活動を時間内に終わらせることができるとよかった。



タブレットに自分の考えを書く姿

② 互いに学び合うための手立て（ワールドカフェ方式）

ワールドカフェ方式は、発表時間を取らなくても共有ができ、学びの隊形として有効であった。さらに学びを深めるためには、児童間での話し合いにおいても叙述にもとづいて話すことの必要性があった。叙述に戻すための教師のつなぐ役割について、意識して取り組んでいくとよいと感じられた。

話し合いの場面では、友達の意見を聞いて、温かい反応を示しており、それが安心して話せる学び合う基盤となっていた。

ワールドカフェ方式で話し合う姿

6　研究の成果と課題

今年度も、「授業づくりの重点目標」を年度初めに統一することで、児童の学ぶ環境を整えることができた。重点目標は、学期ごとに教職員全員で再確認し振り返ることで、常に意識しながら指導に当たることができた。

授業研究をとおして、児童に自分の考えを表現したいと思わせるためには、学級の支持的風土や温かな人間関係、ICT や掲示物を効果的に活用して自分の考えを表出しやすくする工夫が重要であることを再認識した。また、考えを伝えたくなるような課題設定も大切である。児童にとって「必要感」があり「自分事」として取り組め、話し合いたくなるような課題を設定することを、今後も心がけていきたい。

また、国語科において叙述にもとづいて考えを述べるということが大切であり、その視点を教師も児童ももって授業に取り組むことの必要性を実感した。話し合いをしているという形だけでなく、話す視点、聞く視点をしっかりともって話し合いを行わなくてはならないということを強く感じた。そのために、教師が児童の発言をつないだり、叙述に戻したりする役割を担うことも大切である。

これらの反省をもとに、来年度は、話す・聞く活動などの言語活動をさらに充実させて、自分の考えを根拠をもって表現できる児童を目指して研究を進めていき、主体的で対話的に学ぶことができる児童の育成を目指していきたい。